

序

2020年は、新型コロナウイルスによって大学のあり方が大きく問われる年になりました。いまでも続く感染拡大のなかで、大学における学びと経験の質をどのように維持していくのか、学生のみなさんも、私たち教員も、模索の日々が続いています。このようななか、『政治学研究』第64号を皆様にお届けできることに、例年以上の感慨を覚えています。

文字通り試行錯誤とともに開始されたオンライン授業については、様々な意見があります。改善すべき点があることも事実ですが、オンライン授業という形式自体への学生の評価は、必ずしも低くはないようです。工夫と熱意次第で、対面授業と同等ないしそれ以上の教育効果を生み出せる手ごたえを、教員の多くも感じています。

他方、秋学期からは、多くの研究会や少人数の演習授業が「ハイブリッド」形式を含む対面授業を再開しました。そこで学生や教員が改めて感じたのは、ゼミ形式の授業で生まれる学生相互の、あるいは学生と教員とのつながりの貴重さ、知識の伝授に留まらないコミュニケーションの大切さだったのではないかと思います。それを培うためには、やはりオンラインだけではなく、対面で会って語り合うことが欠かせないと、私個人は強く思います。教室でいきいきと語り合う学生を見てみると、彼・彼女たちもそのように実感しているのではないかと思います。同時に、研究会や演習授業を履修していない学生が、こうした経験から取り残されてしまうことへの不安も覚えます。

いずれにせよ、この状況下ですますます重要性を増している研究会における学びの成果を発表する貴重な場のひとつが、この『政治学研究』です。本誌は、主に慶應義塾大学法学部政治学科の研究会に所属する学部学生が寄稿する研究論文集です。投稿論文は学生組織である政治学科ゼミナール

委員会を通じて募集されますが、法学部の教員が組織する法学研究編集委員会、および私たち政治学科学習指導によって監修されます。編集は、慶應義塾大学出版会が行ないます。本誌に投稿しようとする学生は、事前に法学部教員の指導と推薦を受けなければなりません。つまり『政治学研究』は事実上、大学組織が刊行する「紀要」と呼ばれる学術雑誌のひとつです。大学図書館でも、大学院生や大学教員などの研究者が寄稿する他の紀要と同じように扱われ、所蔵されます。

『政治学研究』は、研究者や専門職を志す政治学科の学生が自らの研究の成果を世に問う最初のステップとしての役割も果たしています。今号に寄稿された皆様もまた、私たちの社会の知の系譜を受け継ぐ、優れた人材として飛躍することを願っております。

最後になりましたが、政治学科ゼミナール委員会、法学研究編集委員会、慶應義塾大学出版会を始め、本号の刊行にご尽力された方々に、厚く御礼を申し上げます。

2020年11月30日

法学部教授・政治学科学習指導

塩原 良和